

籠耳

卷之一

305  
119



始



305

119

繪入

籠耳

しあひ  
か  
け  
せ  
結  
と  
ぬ  
り

一



彦耳 彦

年<sup>ト</sup>に<sup>カ</sup>地<sup>ノ</sup>獄<sup>ニ</sup>年<sup>カ</sup>あり<sup>カ</sup>彦<sup>ノ</sup>年<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>里<sup>ノ</sup>惣<sup>ノ</sup>あ<sup>リ</sup>地<sup>ノ</sup>  
年<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>利<sup>ノ</sup>果<sup>ノ</sup>報<sup>ノ</sup>年<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>と<sup>ノ</sup>氣<sup>ノ</sup>吉<sup>ノ</sup>年<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>大<sup>ノ</sup>  
年<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>務<sup>ノ</sup>年<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>曲<sup>ノ</sup>年<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>北<sup>ノ</sup>の<sup>カ</sup>務<sup>ノ</sup>年<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>里<sup>ノ</sup>地<sup>ノ</sup>  
年<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>左<sup>ノ</sup>年<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>水<sup>ノ</sup>と<sup>ノ</sup>右<sup>ノ</sup>年<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>池<sup>ノ</sup>家<sup>ノ</sup>  
年<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>跡<sup>ノ</sup>年<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>神<sup>ノ</sup>と<sup>ノ</sup>余<sup>ノ</sup>の<sup>カ</sup>年<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>徒<sup>ノ</sup>と<sup>ノ</sup>年<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>古<sup>ノ</sup>堆<sup>ノ</sup>の<sup>カ</sup>





養身卷之一

- 一 遠花香そとのかほのり  
付寄わんはつらうがさのたのしみの懐顧
- 二 藝依道賢げいゐだうけん  
付寄おそりつらうがさのたのしみの懐顧
- 三 捨身有すてみなり  
付寄おそりつらうがさのたのしみの懐顧
- 四 家古風裏鬼かふるかぜうらおに  
付寄おそりつらうがさのたのしみの懐顧
- 五 穴賢あなけん  
付寄おそりつらうがさのたのしみの懐顧

中なかに在ある法はの土つち所ところに於おけし此こゝありしと云いふ  
 女め練ねく世よの人ひとが奇きに皆みな目めを此こゝに集あはせしむ  
 自みづか然らしくも名なは沖おほくふまきとく理りハ首くび據たまはせ  
 徒たよの猪ち踞ぢと世よ活くわと引ひかへし儻たうと狂きやうと等とう  
 一いは養やう身みの人ひとあんよの出い所ところよきまあじ  
 と待まちん入いりぬ

州田齋書

六 祇園

祇園は、付青漢の武帝と云れりの識

七 命

命は、武家のごらうと云れりの識  
命は、命は、命は、命は、命はの識

新耳巻之一

一 遠花香

遠花香は、遠花香は、遠花香はの識  
遠花香は、遠花香は、遠花香はの識  
遠花香は、遠花香は、遠花香はの識



何事も無しとてしなむたの心おほく。いふに心骨もんと  
いと持ぬとていふことありてちや年のうちまらこく毒  
りおほひぬと何れもあまのたつたけのうらみ。い  
かまふとて社のうへはつらつらとあまのたつたけ  
ふらにほひあまのたつたけにほひあまのたつたけ  
れをとりていふ人書をしていふとていふ人  
見やとていふ人書をしていふとていふ人  
ゆゑに何れもいふとていふ人書をしていふ人  
をとりていふとていふ人書をしていふ人  
すくたらしとていふ人書をしていふ人  
いふ人書をしていふ人書をしていふ人  
いふ人書をしていふ人書をしていふ人

ていよく半入の心骨もんと。いふに心骨もんと  
はすもとの心骨もんと。いふに心骨もんと  
うらみとていふ人書をしていふ人  
いふ人書をしていふ人書をしていふ人  
いふ人書をしていふ人書をしていふ人  
いふ人書をしていふ人書をしていふ人  
いふ人書をしていふ人書をしていふ人  
いふ人書をしていふ人書をしていふ人  
いふ人書をしていふ人書をしていふ人

二 鹿依道賢  
杜盧輝然 亦在焉也 奇物也 其人曰 予 屢見









たよけ毎もつわて。後六とをすけけりせぬと小とを  
そはゆきけり一あ念たもかり一後六とく人づりされ  
ごは軽介兒も念とそわき何と案書一し  
とわこ一を念とてずんづいむ。向は舟の  
或士はゆづりな鳴田孫也

四 蒙古國喪鬼

持見乃啼と止ふと死むとわこくわはれ鬼く来ふとて  
る。後字多依の弘安四年中條時家が執権の死  
をろこ。元乃世祖とびく日本とせ先々何す何り  
元統國と蒙古國とこと世祖とわこはるこ大元と  
号せり。あまもつてびくわこりこりこり。蒙古國喪  
とるすけいひあやまつて鬼づらふこり。夷賊とを

けり。又いけぬとよと賊とれよ結とふりてえ  
無さとの入り何れ。大和は去元無さとの  
小鬼とみく人とさやもろと世間さのがとこり  
奉納文料よとつわ。それとつて元無さとを頼と  
まろあおとせ。小見を兒やむのそり。又小見と隣  
ゆつあつて。鬼狼とくとり。あまもつて。あま  
の張連来とつて。小見を兒やむ。何れは法障とつて。まろ  
さけ。あまもつて。あまもつて。あまもつて。あまもつて。  
何て。あまもつて。あまもつて。あまもつて。あまもつて。  
けり。あまもつて。あまもつて。あまもつて。あまもつて。  
あまもつて。あまもつて。あまもつて。あまもつて。  
あまもつて。あまもつて。あまもつて。あまもつて。





よいけきとほけまがくせ行まどうりまけき  
 五 穴賢と無善  
 と古のりこいれと果居穴處とくろりひん小  
 こも人お代とありておろし先の人いすて家とて  
 としとまふか地子穴とりのまをぬおけお時  
 地乃まに恙とあふ虫はアま人と整るると是よ  
 びしてお代り文神よ人乃おまらるるまらとまのま  
 恙かおとわくこと下字集よまらり又上代り文は  
 おりり穴賢と年も地乃元とわらうとらぬたぐ  
 恙史のまそれぬやれとらんと今女乃文はとりに  
 りしと年いあかりこといを畧してしと年  
 又女はまらうの事にもと年いまらうとわくおの畧



六 御 直 掛 風 俗

天乃と地は理よりか北の星の人の和より吉  
みちよもわて風は波より漢は武帝  
つくことまはれは星は吉なり星は極の心  
武帝は吉なり星は吉なり星は極の心  
かいくさには星は吉なり星は極の心  
味本小星は類なり星は吉なり星は極の心  
よりゆきいくさやめは星は吉なり星は極の心  
たましい天の星は和より星は吉なり星は極の心  
久星は吉なり星は吉なり星は極の心  
のちやく敵とたかぬは星は吉なり星は極の心  
中軍にからむは武帝は吉なり星は極の心

まみ殿下いさえくいと。往む時往てむふ日と  
いくさの首途すいしとて武帝とまひく我  
往て敵とまひくいと。往む時往てむふ日と  
まみ殿下いさえくいと。往む時往てむふ日と  
色已心とすくいと。往む時往てむふ日と  
乃往む時往てむふ日と。往む時往てむふ日と  
くさやけく。往む時往てむふ日と。往む時往てむふ日と  
敵いすくいと。往む時往てむふ日と。往む時往てむふ日と  
そく也。往む時往てむふ日と。往む時往てむふ日と  
おの心と。往む時往てむふ日と。往む時往てむふ日と  
て岩間におくは。往む時往てむふ日と。往む時往てむふ日と  
あぐせまといは。往む時往てむふ日と。往む時往てむふ日と





昼食と云ふ人より多きその名もたゞしあり侍の  
中食といふ町人の昼食といふもさういふ點も  
る中食と云ふめくは昼食といふ農人の勤作  
いふは亦あやしく中食と云ふは供侍といふれと  
あやまりておとどきと云ふは夕飯と云ふは  
あやまりておとどきと云ふは夕飯と云ふは  
乃ゆんよたぐんまよと云ふは書食と云ふは  
とくも職人といふは夜といふはさういふは  
とくも職人といふは夜といふはさういふは  
もおそくたすそまをたれと云ふは職人の世  
といふはさういふは中食といふは武家の供  
院様もねし伝はしや先まといふは飯といふ

てはと云ふと云ふと云ふと云ふ也飽すくく  
温も衣て逸居るを禽獸よりうと孔子云  
とれと云ふと云ふ禽獸の礼儀と云ふと云ふ  
ては飯子といふと云ふは職人の世の職と云ふ  
死かといふと云ふは下は昼食といふ釋迦孔子  
これと云ふと云ふは民の食を為すといふ史記  
侯が傳ふと云ふは今在る食といふは肉  
黍類といふは七十餘歳といふは子未を肉十  
作はくといふは符堅掃蓋即復點といふは人  
小米を石肉三十斤といふは又米は時常  
二百斤蜜漬の鮓といふは一食といふは蕭穎  
胃は白肉の鮓二斤といふは馬希希といふは雞

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十

印行三百部之内  
第 號

十探づくひをなす。飽食論の論議は、  
 けつしつしつと大食の男極強力の人より、  
 飽食の無人より、  
 人乃食を好む養育の人は、  
 夫の食の好む病をなす人、  
 とは、  
 とよとせの食の人は、  
 人乃食を好む養育の人は、  
 腹よんとしつれをなす人、  
 食とつひせよ所謂穀粒とよ希少也

一之巻畢

昭和十三年十一月廿五日印刷  
 昭和十三年十一月廿八日發行  
 新 生 閣  
 第一回  
 東京市牛込區富久町八十四番地  
 編輯發行所 山田清作  
 印刷所 佐藤謙之介  
 製本所 阿部五郎  
 池上幸二郎  
 東京市牛込區富久町八十四番地  
 發行所 米山堂  
 會 社 名 義 務 員  
 會 社 名 義 務 員

終